



# この一冊

Vol. 110



当会会員 行方 美彦 (37期) ●Yoshihiko Namekata

音楽は私の趣味の1つである。最近は専ら聴くだけになってしまったが、時折、音楽関係の本や楽譜を見にいき、面白そうなものを購入している。この一冊も偶然手にしたものである。ジャンルの相違はあるだろうが、音楽に興味がない人はおそらくいないと思う。音楽の何がいいのか。副題は「音楽の何に魅せられるのか?」である。

私は、類書ある中、結論が出そうもないこの難問を、著者がよく言えば多角的に、悪く言えばああでもない、こうでもない論じていること自体に大変興味を覚えた。

内容は多岐にわたるが、まず音楽とは何か(楽音、メロディ、和音、リズム、音色など)について例を挙げて説明されている。退屈だった音楽の授業よりずっと面白い。続いて本題ともいえる音楽の魅力の原因につき、「音楽を聴くと、脳はどう活動するのか」、「音楽はなぜ人を感動させるのか」という2章が置かれ、さらに、音楽の言語性、音楽の意味・条件という本質的問題に触れている。

自動的なジャンル分け機能や、人工知能による作曲などが最近話題に上るが、そもそも音楽のジャンルとは何かな

## 『音楽の科学~音楽の何に魅せられるのか?』 (THE MUSIC INSTINCT)



フィリップ・ボール 著  
夏目大 訳  
河出書房新社  
4,104円(税込)

どの問題についても論じられている。

さて、音楽が人を感動させる大きな要素として、「予測と裏切り」が挙げられている。「次の展開をほのめかしては、そのとおりに展開したり、裏切ったり、音楽はその連続でなりたっている」。聴く者は予測が当たっても、はずれても快感を覚えるのである。

そこで快感を与えるため作曲家はいろいろな手法を使い予測を操ることになる。本書ではその手法も具体例を挙げて紹介されている。面白い。

音楽に限らず、経験を積むと何事もある程度予測がつくようになる。当初違和感を覚

えた不協和音が次第に快感に変わるといった経験は誰にでもあるはずである。その結果、裏切られる快感をもっと味わいたくなる。「もっと裏切って!」と。快感を提供する側は大変である。ただ、本書でも触れているが、いわゆる大作曲家たちは靈感によって作曲をしたと語っている。靈感と音楽については、大作曲家へのインタビュー記事が掲載されており(『大作曲家が語る音楽の創造と靈感』アーサー・M・エーブル著、吉田幸弘訳、出版館ブック・クラブ)、彼らは、神の啓示や靈感と自らに備わった「至高の技芸」によって作曲したと述べている。

年の瀬も迫り、『第9』、『メサイア』、クリスマスソング、紅白歌合戦、忘年会のカラオケなど音楽のシーズンである。演歌(艶歌)も歌われるが、演歌といえば、石川さゆりの『天城越え』はプロにしか歌いこなせない難しい曲というコンセプトで作られたそう(『創られた「日本の心」神話』輪島裕介著、光文社新書)。プロ並みに歌いこなす私の知る当会会員は、今年度は理事者として多忙を極めており、拝聴できそうにない。音楽に魅せられた私としてはとても残念である。 NIBEN